

すみだの事例から学ぶ外国人介護 ～誰もが働きやすい介護の現場をめざして～

●介護人材対策委員会

1

外国人介護職員の前に立つ壁

～7年間の日本語教育実践から見てきたこと～

すみだ日本語教育支援の会で講師を務める中野玲子先生および宇津木晶先生に、7年間の教室運営から見た課題についてお話いただきました。

すみだ日本語教育支援の会とは

介護領域で働く外国人に対する日本語支援をめざし、早稲田大学大学院日本語教育研究科宮崎里司教授を会長に、墨田区内で特養等を運営する社会福祉法人賛育会、定年退職者を中心としたボランティア団体NPO法人てーねん・どすこい倶楽部、墨田区らが連携し、2008年に設立。介護の仕事に従事または関心のある外国人を対象に、毎週金曜に無料の日本語教室・パソコン教室を開催するほか、出張講座や介護の日本語教育設置のコンサルト等を実施。また、介護福祉士国家試験について国や都議会へ要望活動も行っている。



すみだ日本語教育支援の会

<http://sumidanihongo.web.fc2.com>

中野先生は、「日本語は“超”難しい。特に介護現場は難解な専門用語であふれています。介護の現場の人がそのことに気づくことが、壁を壊す第1歩」として、具体例を示しました。

一般的な日本語の壁

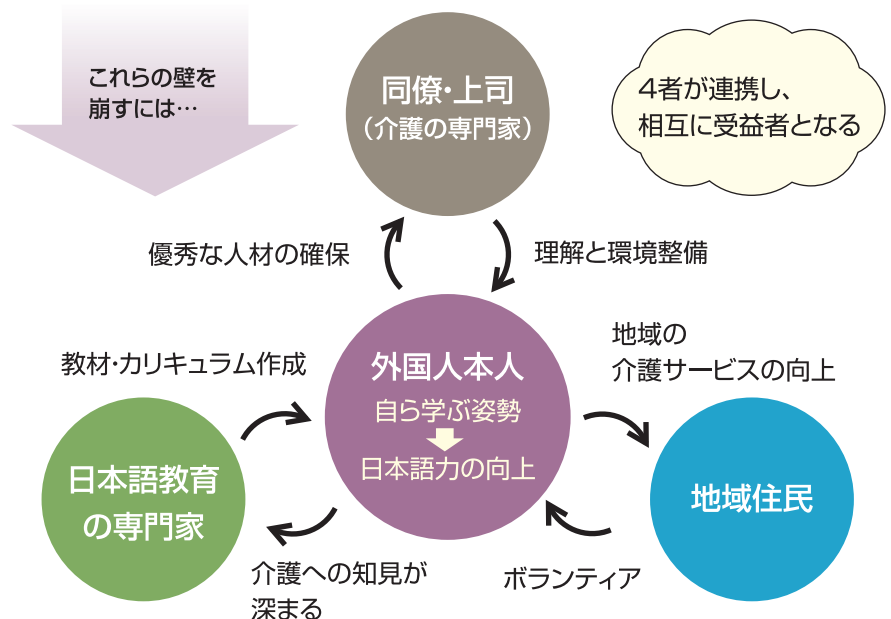
- ① 漢字には音と意味がある → トイレの神?
- ② 漢字が字に見えない → 日本人からみたタイ語のようなイメージ
- ③ 同じ言葉で意味が違う → あぐらをかく
- ④ 文末があいまい → 「それはちょっと…」



宇津木先生は、「介護の仕事に適性がない日本人よりも、言葉の問題はあっても適性のある外国人の方が、将来的によい人材になる」とし、根気強い日本語教育支援の場が必要と訴えました。

外国人が介護の職場でぶつかる壁

- ① 適性が生かされない → 日本語力に不安があると単純作業に終始
- ② 継続した日本語学習が困難 → 休みがとれないなど教室に参加できない
- ③ 同僚の理解が得られない → 日本語の難しさがわからず配慮が不足



職員の受け入れ

東京都社会福祉協議会 東京都高齢者福祉施設協議会 介護人材対策委員会は7月22日、外国人介護人材の活用のための日本語教育の課題について、「すみだ日本語教育支援の会」の活動事例をふまえながら、座談会形式で検討を行いました。

2 [座談会] 日本の介護現場における外国人介護者を考える

疋島氏 (フィリピン出身)

——会社の支援は

日本語教室に参加するためのシフト調整など配慮をしてくれている。また、介護福祉士取得前から新入職員の指導も任されるなど、常に挑戦をさせてもらっている。

——今年4月に介護福祉士に合格して変化したことは

以前は不安を感じていた利用者からも、「すごいね」と信頼につながった。

——次の目標は

漢字や認知症についてもっと勉強したい。ケアマネジャーにも挑戦したい。

丹沢氏

——職場で雇用している外国人は

ロシア、中国、フィリピン出身の4人の外国人がいる。語学レベルや仕事の能力は人それぞれだが、それは日本人も一緒。まずは雇用してみる。日本人にないポジティブさがある。

——雇用するうえで注意点は

たとえば誤配膳防止に名前にルビを振るなど、利用者に危険が生じないことが大切。

植竹氏

——日本人介護職員の負担は

以前、60人規模の施設で8人の外国人を雇用していた。負担はあるが、日本人にとっても勉強になる。実際に受け入れてみると、適性があれば大丈夫だと感じている。

——人材確保の状況は

大変厳しい。外国人であろうと、働きたいという人をきちんと支援しなければ、介護現場は成り立たない。

●座談会登壇者

すみだ日本語教育支援の会	日本語講師	宇津木 晶 氏
和翔苑 わしやうえん とうきょうせいふうえん 東京清風園	施設長	中野 玲子 氏
ケアリッツ日本橋	施設長	丹沢 正伸 氏
日本語教育学会	訪問介護員	植竹 香苗 氏
司会：たちばなホーム	副会長	疋島 ヘルニア 氏
	施設長	嶋田 和子 氏
		羽生 隆司 氏

嶋田氏

——日本語の壁に対し、私たちが取り組むべきことは

EPAのほか、定住外国人に対するサポートが必要。介護の専門家、日本語教育の専門家、地域住民が三位一体となって、外国人介護職員を支える仕組みを7年間継続している“すみだモデル”を全国へ発信してほしい。

——技能実習生の介護分野の受け入れについては

ハードルを下げるために日本語を軽視した議論が行われていることが問題。コミュニケーションが重要な介護現場で語学力が足りず、単純労働にとどまることが懸念される。2月4日に厚生労働省が示した「外国人介護人材受入れの検討会」の中間まとめに対し、日本語教育学会として問題点を指摘し、要望書を提出している。



中野氏・宇津木氏

——今後取り組みたいことは

日本語を勉強しても、仕事内容が変わらないことは多い。教室と職場が連携し、適切なステップアップが人材育成につながる。教室でも、7年間勉強した疋島さんが、今度は教える立場になるなど、循環の仕組みをつくりたい。

羽生氏 (介護人材対策委員長)

「地域の介護は地域で解決しよう」と墨田区内施設が連携して、介護職員初任者研修講座開講を目指している。区内の施設に就職すれば、実質授業料が無料になるしくみ。日本語教育の経験を生かして、地域在住の外国人にも受講してもらいたい。

EPAや介護技能実習生については単なる労働力の輸入ではなく、国際交流という視点で受け入れていきたい。東京は物価が高く、受け入れにあたっては衣・食・住も課題。地域振興につながる空き家活用なども検討したい。